



終末期の医療で、身体が辛い状況にできたとして、それ以上は、本人の希望を聞いて、そして、どうしようもない本人の運命を「温かく見守る」しかないのです。少なくとも若い患者さんの死において緩和ケアの目的は死を受容させることではないのです。私はそう思っています。』

この文章に出会い、がん患者として、心の荷が少し軽くなった。また、医師として、いつも、患者さんに温かい心で接することが大切であると確認した。

本書のまとめである次の文章も、何回読んでも、心に響く。

『医は「仁術」といわれてきました。「仁」とは思いやりです。二十世紀には患者さん本人に病気の悪化を、そして死を隠すことで「仁」、「愛と思いやり」を発揮してきました。しかし、二十一世紀には患者さんに病気の悪化を告げて、短い命を告げて、そしてこの「仁」が「愛と思いやり」が、どのような形で発揮されていくのかということが、われわれ医療者側の大きな課題であると思います。

死が近いことを知らされて、死を直面しての二十一世紀の死生学で、死生観とは、けっして諦めることではない。他人に「諦めろ」と言われて諦めることではない。

「悟ること」でもない。「悟ったふりをする事」でもない。生きたいならばはっきり生きたいという。そして、少しでも自分の思うようなことに近い人生を生きることであると思います。

もし死に直面していても、どうにかして、心落ち着けられる、心安らかであることは、誰しも希望することであると思います。そのためには、自分が生きてきた人生に納得できるとまではゆかなくとも、それでも、少なくとも終末の医療に納得できていること、安心できる、信頼できる医療者が傍にいることは、大切な条件であると思います。

「人間はみんな死ぬ。」そんなことは、百も承知なのですが、いまここですぐ死ぬのではありません。いつかは死ぬけれど、いま死ぬのではないから生きていられるのです。何か少しでも、小さくとも希望を持って生きるのです。

たった一度の、たった一度の人生です。どの、どんな時代に生きても、たった一度の人生です。何も悪いことをしていないのに、自分ががんになったのは不公平です。特に若くしてがんになった方は、人生不公平です。

自分の病気を知って、言うときは言って、頑張って生きて、人生、不公平だからこそ、頑張って生きて、生きて、そして、医療に、自分の人生に、少しでも納得していただけたらと思います。私は、応援しています。必ず応援しています。』

是非、医療従事者に読んでいただきたい。また、医師から死が近いことを告げられ、奈落に落されている患者様。佐々木先生の慈悲により、少しでも早く立ち直られて、「がんを生きて」いただきたい。

会員 井上 林太郎